国語B

（90分）

注意　解答はすべて解答用紙に記入すること

第一問　次の文章を読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、表記の一部を改めた）。（60点）

一

ここで扱おうとするのは、ドイツ文学者高橋健二によって翻訳されている、ヘルマン・ヘッセの『少年の日の思い出』である。翻訳小説であるからドイツ語の原作と比較検討するというアプローチの仕方も可能である。また、主人公が少年であるから、児童文学として読むことも可能であろう。しかし、ここでは、A日本の近代文学研究を専門とする立場から、高橋健二訳の日本語版ヘッセ全集を基本文献にして、『少年の日の思い出』を論じ、さらには『少年の日の思い出』から導き出される問題も考察してみたい。

まずは、素手でこの小説に向かうことから始めよう。素手といっても、すでに読者（この場合は私）の頭の中には、文学を含めての雑多な情報が蓄積されていて、しかもそれらによって解読格子のようなものが、漠然としたものとしてであれ、形成されているのだから、文字通りに〈心を白紙にして〉〈キョシン[1]坦懐（たんかい）に〉というわけにはいかない。素手で向かうというのは、あくまで程度問題であり、読者の側の心構えの問題にすぎない。

チョウチョの採集に夢中になっている主人公の少年は、隣に住んでいる男の子でやはりチョウの採集をしているエーミールが持っている、とても珍しいヤママユガの標本を盗もうとする。といっても、最初から盗もうとしたのではなく、エーミールに標本を見せてもらおうと思って彼のところへ訪ねて行ったのだが、エーミールがたまたま不在だったため、ついヤママユガ見たさに彼の部屋に入り、それを見ているうちに「この宝を手に入れたいという逆らいがたい欲望を感じて」盗んでしまうのだ。だが、部屋から出たところの階段で人の足音を聞いた「瞬間にぼくの良心は目ざめ」、「自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った」。その後すぐに、少年はヤママユガをもとに返すのだが、階段で人の足音を聞いたときに「本能的に、獲物をかくしていた手を、上着のポケットに突っこんだ」せいで、ヤママユガの標本はつぶれていたのである。やむなく少年はつぶれたままのヤママユガをもとのところに置いて帰る。

帰宅してから母親にすべてを告白した少年は、母親に諌められ、エーミールのところに謝罪しに行くのだが、少年は、「模範少年」であるエーミールは「ぼくの言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろう」と思う。結局、少年の予想は当たっていたばかりでなく、「エーミールは激したり、ぼくをどなりつけたりなどはしないで」、「彼は冷淡にかまえ、依然ぼくをただけいべつ的に見つめていた」。そして、少年が代償として自分のチョウの収集を全部やると言っても、こう語るのである。――「結構だよ。ぼくは君の集めたやつはもう知っている。そのうえ、きょうまた、君がチョウをどんなに取り扱っているか、ということを見ることができたさ。」、と。少年はその瞬間、すんでのところでエーミールの「のどぶえに飛びかかるところだった」が、なんとか自制する。そのときの状況は少年の目には、「ぼくは悪漢だということにきまってしまい、エーミールはまるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義をたてに、あなどるように、ぼくの前に立っていた」ように見える。そして、「そのときはじめてぼくは、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った」と思うのである。その夜、少年は自分の標本のチョウをこなごなにする。

以上、小説のクライマックス場面をやや詳しく追いながら、『少年の日の思い出』を振り返って見たのだが、気付かされるのは、(おそらく)多くの少年少女ものの小説と違って、これが〈罪と許し〉の物語になっているのではないこと、したがって、少年とエーミールの対立も和解、融和されることはないことである。たとえば、和解ということですぐ思い浮かぶのは、有島武郎の『一房の葡萄』(一九二〇)であろうか。これも、主人公の少年が同級生の持ち物(絵の具)を欲しくなってそれを盗むという、『少年の日の思い出』と似たような状況設定の話である。だが、『一房の葡萄』では、罪を悔いた少年をその同級生は許すのである。この和解の成立には、若い女の先生の適切な〈指導〉が介在していたのであるが、ともかく、「僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなつたやうです」、というふうなハッピーエンドの物語になっている。

けっしてハッピーエンドの物語ではないが、やはり和解と融和の物語であるといえるのは、新美南吉の『ごんぎつね』(一九三二)である。よく知られている物語なので、ここで解説する必要はないだろうが、注意したいのは、いたずら心からうなぎを盗んだ「ごん」が、そののち兵十の家に松茸や栗を運んで、「ごん」なりの罪の償いをしていること、もっというなら、償いの

行為をすることが物語の中で許されていることである。さらには、償いの行為と「ごん」のその気持ちが、物語の最後で兵十に了解されるのであり、しかも、兵十に気持ちが通じたということを「ごん」は死ぬ間際に知ることもできるのである。「ごん」はそのことにおいて報われているといえる。つまり、『ごんぎつね』は、「ごん」が兵十の誤解によって撃ち殺される悲劇的結末を迎える話であったとしても、互いの気持ちが通じ合う物語として、また、罪の償いが成立する、善意の物語として読者をカタ(注1)ルシスに導くものとなっているのである。「ごん」の死も、悲劇であるが故に、そのカタルシスに大きく寄与しているのだ。

これらに対して、『少年の日の思い出』にはハッピーエンドもカタルシスもない。それは、前非を悔いた者の気持ちが相手に伝わらないからであり、もっといえばその気持ちが相手から「けいべつ的」な眼差(まなざ)しで拒絶されるからである。『少年の日の思い出』では、まさに主人公の少年が「悟った」ような、「一度起きたことは、もう償いのできないものだ」という、いわば人生の苦い真実が読者に示されるのだ。違う言い方をするならば、『少年の日の思い出』は、読者をカタルシスの中に甘く取り込むのではなく、C読者を冷たく突き放し、この苦い真実をどう考えればいいのか、といった問題に向き合わせる話なのである。

このように見ると、『少年の日の思い出』は、劇においては観劇者をカタルシスに導くのではなく、問題に直面させることが重要だとする、ブレヒト(注2)の異化(注3)効果にも似た効果を読者に及ぼす小説だといえるかもしれない。とりわけ、人生には許しと和解があるものだと漠然と信じている者が多いのではなかろうかと思われる十代前半の少年少女が読者の場合には、その効果が生じるであろう。あるいは、『一房の葡萄』と『ごんぎつね』が日本の話であり、『少年の日の思い出』がヨーロッパ(ドイツ)の話であることに着目するならば、ユング(注4)心理学者の河合隼雄(かわいはやお)(注5)が述べている、日本の社会は融和とホウセツ[3]という母性原理によって成り立っているのに対して、ヨーロッパは対立と切断という父性原理であるという問題に、格好の事例を提供することになるかもしれない。しかし、多くの日本(人)論や西洋(人)論に見られるような、わずかな事例でもって、実証性の極めて乏しい論理を展開することは戒めなければならないだろう。

ここでは、得てして抽象論議に陥りがちなそれらの問題に話を持っていくのではなく、もう一度小説に立ち返って、『少年の日の思い出』はどのような特質を持った小説なのか、という問題から考え直してみよう。

二

D 小説の特質を考えるときにまず問題にしなければならないのは、小説の方法、言い換えれば小説の書かれ方である。『少年の日の思い出』は、「わたし」という語り手が「わたし」の家に泊まっているらしい「客」に自分のチョウの標本を見せるところから話が始まる。「客」は、自分も子どものときにはチョウの「熱情的な収集家」であったこと、しかし、「自分でその思い出をけがしてしまった」と語り、あのヤママユガをめぐる出来事を「わたし」に話し始める。つまり、「客」の方が物語の実質的な語り手となっていて、自分も当事者であった出来事を「わたし」に、そして読者に語り出すのである。

これは、物語自体の内部に話者を設定する、いわゆる〈内部話者の方法〉あるいは〈特定視点の方法〉である。注意したいのは、「客」は、「今でも美しいチョウチョを見ると、折り折りあの熱情が身にしみて感じられる」というふうに、現在時の視点から過去を振り返るという体裁を一応取って語っているのであるが、物語全体としてはほとんど少年時の視点に同一化してしまっていることだ。そのことは、少年の感情の起伏のままに「客」の語りは進んでいくことから窺(うかが)われよう。「客」は、少年の感情や行為を、大人になった現在から批評(批判)することなどしないのである。小説の構造もそれに対応したものになっていて、小説の末尾に至っても、話は現在に戻ることはない。「客」の少年時のまま、その感情の昂[4]ぶりのまま、小説は終わるのである。

『少年の日の思い出』の物語は、このように「客」の少年時の視点に一元化された構造になっている。したがってこの物語では、大人になった現在時からの批判も他者からの批判も排除されているのである。この点において、『少年の日の思い出』にはある種の独善性があるといえる。そのことは、この物語をたとえばエーミールの視点から語ったとすれば、どのような物語になるだろうかということを思考実験してみればわかるだろう。

エーミールにとってもヤママユガは貴重なコレクションで、しかも自分がサナギから孵[5]したものである。それを無残な形にされてしまったのである。相手の少年が自分の罪を告白して謝罪してきたわけだが、エーミールとしては、突然そんなことを言われても、〈はい、許します〉とはその場ですぐには言えるものではなかっただろう。エーミールにとってヤママユガの標本

は宝物であったはずだ。エーミールは怒り心頭に達していたかもしれないし、唖然とも呆然ともしていただろう。十歳ぐらいの子どもの反応として、主人公の少年の告白を聞かされて、その少年の苦しい胸の内を思いやるよりも、怒りを顕わにすること、あるいは報復の方に気持ちが傾くことは了解できる。ただ、エーミールの報復は、「模範少年」らしく、暴力的ではなく、いわば抑制されたものであった。それが、主人公の少年を「ただけいべつ的に見つめていた」という態度となって現れたのだといえる。

いま私は、エーミールの視点からというよりも、エーミールに同情的な視点からこの物語を見てみたのだが、おそらくエーミールに視点を一元化するならば、ヤママユガをめぐる出来事も、エーミールの側に読者の共感が傾くように色付けされた物語になっただろう。しかし、『少年の日の思い出』では、被害者であるはずのエーミールはむしろ物語の中で敵役にされているのだ。あるいは、少年からもエーミールからも等距離の第三者の視点から語ることもできたはずだが、ここではそういう方法も取られていない。『少年の日の思い出』は、加害者である主人公の少年の方に読者の共感、少なくとも同情が傾く小説になっているのだ。

（綾目広治「幼いチョウ採集家の〈逸脱〉」による）

（注）1　カタルシス――精神の浄化。
2　ブレヒト――オイゲン・ベルトルト・フリードリヒ・ブレヒト（一八九八～一九五六）、ドイツの劇作家、詩人、演出家。
3　異化効果――現実を批判的に対象化し、見慣れた事物を初めて見たように異様に感じさせ、その本質を観客にさとらせる効果。
4　ユング――カール・グスタフ・ユング（一八七五～一九六一）、スイスの精神科医、心理学者。
5　河合隼雄――（一九二八～二〇〇七）、日本の心理学者。

問一　傍線部1～5のカタカナを漢字に、漢字を訓読みのひらがなに書き改めよ。

問二　傍線部A「日本の近代文学研究を専門とする立場から、〜『少年の日の思い出』を論じ」とあるが、「二」の章では、どのような方法で作品を論じようとしているか、次のア〜オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　作者自身の人生についての考えを他の作者の場合と比較するという方法。

イ　読者の対象年齢や作品ジャンルによる特質を作品から抽出するという方法。

ウ　登場人物の心情の変化の過程を表現に即して確認していくという方法。

エ　物語の展開の構造を同じような状況設定の他の作品と比較するという方法。

オ　作品に表れた日本社会とヨーロッパ社会の思想的背景を比較するという方法。

問三　傍線部B「やはり和解と融和の物語であるといえるのは、新美南吉の『ごんぎつね』（一九三二）である」とあるが、『ごんぎつね』における「和解と融和」とはどういうことに表れているのか、「罪の償い」ということばを使って説明せよ。

問四　傍線部C「読者を冷たく突き放し、この苦い真実をどう考えればいいのか、といった問題に向き合わせる」とは、どういうことか、『少年の日の思い出』に即して八〇字以内で説明せよ。

問五　傍線部D「小説の特質を考えるときにまず問題にしなければならないのは、小説の方法、言い換えれば小説の書かれ方である」とあるが、ここでは『少年の日の思い出』の特質はどういうところにあるというのか、五〇字以内で説明せよ。

問六　傍線部E「エーミールに視点を一元化する」とは、具体的にはどのように小説を書くということか、「語り手」ということばを使って五〇字以内で説明せよ。

第二問　次の文章を読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、表記の一部を改めた）。（60点）

こんな時間帯に人混みのなかを歩くのは、いつ以来だろう。人が多いとはいっても、前後左右にぴたりとくっついているわけではないから、一歩二歩のゆとりはあるけれど、その貴重なゆとりの圏内に知らない人たちがいきなり侵入して距離を詰め、ショルダーバッグになにかを当てて、わたしを思わぬ方向へついと引っ張る。動きが止められ、身体が不自然にひねられるたびに、手ぶらで来ればよかったと思う。

結花（ゆうか）が歩いてくれないのよと妹が小声で電話をしてきたのは、一時間前のことだ。疲れが出たのか、あんまりぐずって甘えるので、抱っこをしてきた、腕が張ってもう荷物も持てない、お姉ちゃん、助けに来てと泣きつかれた。タクシーを使えとはとても言えなかった。電車の往復だけでかなりの出費なのだ。妹は娘を連れて、彼女の義母の三回忌を終えた田舎から戻るところだった。A文夫さんは、会社の都合でひと足先に帰っていた。

深い蒼（あお）が横に筋を引きながらまだなんとか陽（ひ）の名残をとどめている夕空を前に、少し迷ったあと、天気予報を信じてビニール傘を二本摑（つか）んだ。このあいだ買ったばかりの折り畳み傘をまたなくして、手もとにそれしかなかったのだ。状況から考えて、路線バスに置き忘れたにちがいない。営業所に問い合わせてみたら、なにか特徴を挙げてくださいと言う。茫然（ぼうぜん）としてしまった。雨の日だけ駅前の雑貨屋にならべられるような安い傘に、特徴なんてあるのだろうか。

かろうじて思い出したのは、黒い持ち手を包んでいた透明のプラスチックの、たぶん破り取るときに役立つミシン目みたいな穴の列のちくちくしたひっかかりと、濡（ぬ）れてぬるっとした感覚の奇妙なずれだけだ。手のひらが、それを記憶していた。あ、そういうのがひとつありますね、と担当者の声が大きくなる。路線も合致してますから、まちがいないでしょう。わたしは名前と電話番号を伝え、なるべく早く取りに行きますと言った。そして、果たせぬまま何日もやり過ごしていた。今日まで雨が降らなくて幸いだった。

ビニール傘はいつ買ったのか覚えていないほど古く、薄い黄色に変色している。途中不安になって開くかどうか確かめてみ

たら、どちらも一部がぺったり貼り付いていて、めりめり音を立てた。長さも柄の太さも異なる二本をいっしょにぶら下げると不規則に揺れ、足に当たって歩きにくい。恥ずかしいけれど、まとめて胸に抱えた。

多鶴子(たづこ)おばあちゃんと最後に会ったのは妹の結婚式のときだから、六年前のことになる。小柄で、よく日に焼けて、一見いかつい感じだが、笑顔も心根もきれいな人だった。母親代わりとして出席したわたしの両手をきつく握り、祥恵(さちえ)さんをありがとう、あなたがこれまでよう頑張ってくだすったおかげです、ありがとう、と彼女は何度も頭をさげた。皮膚も肉もちゃんとついてるのに、それを通り越して細い骨の硬さだけが伝わってくるみたいな手の感触と、少し擦れた声をいまも忘れない。

義弟の実家は、交通量の多い県道から一時間弱、ゆっくり側道を走った山間にある。小さなスキー場で知られる町だ。かつては町営だったそうだが、運営が地元の企業に任されたのを機に老朽化したリフトが一新され、休憩所は夏場でも展望台を利用できるレストハウスと名を変えた。改修直後はそれなりの集客があったという。でも、妹が文夫さんと知り合った頃には、賑(にぎ)わいもピークを過ぎていた。

話が進んで、田舎のご両親にアイサツ[1]しなければとわたしが動き始めたとたん、こういうことは男の方から女の方へ出向くものだと向こうは譲らず、結局、たがいの住処(すみか)の中間にある大きな町のホテルで落ち合うことにした。結婚式もそこで開いたから、皮肉にも、多鶴子おばあちゃんの葬儀のときが、義弟の実家を訪ねる最初の機会になったのである。穏やかな里山と崩れのあとのようなカンシャメン[2]が印象深かったものの、どこにでもありそうな、ただし、知り合いか親族がひとりいるだけでその大切さの度合いがまるでちがってくる——ふだん忘れられているだけに、いっそう大切になる——ようなその町へ、妹夫婦はお盆と正月だけでなく、長い休みのたびにかならず帰省していた。

地下通路には、おなじように傘を持っている人がちらほら見えた。[B]女性たちが手にしているのは、形も色もうつくしい、装いの一部になりそうな品ばかりで、ビニール傘を、それも二本抱えているような女性はさすがにいない。

ホームに上がると、やはり雨が降り出していた。横風も少しある。列車が入ってきた瞬間、待ち合わせの場所をまちがえていたことに気づき、あわてて走った。ホームがこんなに長いとは思わなかった。いや、知ってはいたはずなのに忘れていた。

すでに降車がはじまっている人口密度の高いレーンを、ラグビー選手さながらジグザグにステップを踏み、それでも人と接触はしないよう進んで行くと、いきなり開けた視界のなかに、結花ちゃんの手を引いた妹が立っていた。リュックを背負っているのに重そうなショルダーバッグを肩に掛け、おまけに土産物の紙袋をふたつぶら下げている。全部奪い取ると、礼を言いながら妹はとつぜん笑い出した。傘を抱えて前のめりに突っ込んでくるんだもの、おかしくって。

「ここで待ってるつもりだったのに、頭とお尻をまちがえちゃったのよ」

「あたまとおしり！」

今度は結花ちゃんが反応した。

「幸恵(ゆきえ)おばちゃん、あたまとおしりだって！」

急に元気になった娘を見て、あっちの家じゃ、こんなふうに人の言葉に引っかかったりはしなかったのよね、と妹は複雑な顔をする。C わたしの言いまわしが変だからよと返しながら、ホームの屋根の上に少しだけ覗(のぞ)いている空に目をやって、とりあえず家の近くまで戻ろうと言うと、ちょっと休みたいなと空いた方の手で肩を揉(も)むように触った。来てもらったら、ほっとしちゃった、飲むか食べるか、ここでひと息入れさせて。

結花ちゃんをなんとか歩かせ、駅構内の、和も洋もある店に入った。コーヒーにミックスサンドイッチをひとつ、それからオレンジジュースをふたつ。妹は休みなしにしゃべりつづけた。かなり気疲れしていたのだろう。まずわたしと話がしたかったのだ。かすかに記憶のある親族の、善も悪もない奇妙な逸話が、次々にこぼれ出てくる。大日向のおじさんという遠縁の人の果樹園にサルノコシカケが繁殖し、これは幹が腐りかけている証拠だから処分しようと業者を呼んだら、それに異を唱えて本物の猿が腰掛けていた。[3] 当人が赤い顔で吹聴するそんな話が嘘(うそ)かまことかで、男たちがとっくみあいの喧嘩(けんか)をしたと聞いて耳を疑い、その場にいたらまた大変だったろうけど、ちょっと見てみたかったとも思った。

結花ちゃんにも、事件があった。障子の貼られた引き戸の、ふにゃりとした頼りない感じが面白くて何度も開け閉めしているうち勢い余って戸をはずしてしまい、いっしょにひっくり返って柱の角で頭をしたたかに打った。ところが長兄の奥さんか

らもらったお菓子の袋は手放さなかったので、さすが文夫の娘だと一同大笑いになったというのだ。

「それでね、いまになって、こんなのもらっちゃったの」

妹はショルダーバッグからなにやらティッシュにくるんだものを取り出して、テーブルの上に置いた。やわらかそうに見えて、こつんと固い音もする。包まれていたのは黒く変色したボルトだった。

「多鶴子おばあちゃんの形見。足に入ってたやつ」

「足って、骨折したときの？」

「そう」と妹は言った。

結花ちゃんがクレヨンで描いた絵を送ったら、おばあちゃんはひどく喜んでわざわざ額を買い、文夫さんが小学生のとき書道展でもらった賞状の隣に、大切なひ孫の作品を掛けようとした。ところが伸ばした手の長さが少し足りず、金具に紐を掛け損ねてバランスを崩し、踏み台にしていた椅子から落ちて4腿の骨を折ってしまったのである。額はとっさに抱えたらしく、ガラスが割れることはなかった。妹夫婦は、おばあちゃんがいかに結花ちゃんの絵を大事にし、身を挺して守ってくれたかをいくらか大げさに話して聞かせた。

ちゃんと骨がついたら、ボルトが覆われてしまう前に抜くと言われていたのに、その手術を受けることなくおばあちゃんは亡くなった。文夫さんも妹もわたしも火葬場では呆けたようになっていて、前後のことをよく覚えていない。みなが骨を拾ったあとその金属片に気づいた長兄は、許可を得て持ち帰っていたのだそうだ。

「結花がひっくり返るのを見て、義兄さんが思い出したのよ」

「あたしも、もらった」と結花ちゃんが口を挟む。「おじさんがくれた。おばちゃんに見せてあげる」

「本物は、この子が大きくなってから譲れってことなのよ」

そう説明して妹はリュックの方を探り、製本に使う万力みたいな、立派な木のボルトを取り出した。ナットもついている。金属はあぶないし、失くすといけないので、製材所にあった古いものを代わりにくれたらしい。すごいね、よかったね、とわ

たしは精一杯ほめた。

「これだったらいっしょにもえた」

D 不意を突かれて、一瞬、言葉を失う。

「おばあちゃんの骨には大きすぎるよ」と妹がふざけてわたしの空白を補った。

「使わなくて正解」

「いくつになったら、ほんものくれる？」

「お利口さんになったら」

「じゃあ、それまでだいじにする。あたしもつつむ」

「何で包もうか。タオルがあるけど、さっき水をこぼしてフいたでしょ、あとは……」

ふと思いついて、わたしは自分のショルダーバッグを覗き込んだ。内側のポケットをがさごそ探ると、折り畳み傘の外袋が丸めて放り込まれていた。あのときは気づかなかったけれど、口のところが紐綴じになっている。目で見るかぎり、大きさは十分だ、これなら入る。あった、とわたしは言って、不思議がるふたりには見えないよう両手で隠しながら小さく丸め直し、鳩を取り出す手品師みたいにテーブルの上に載せた。手をひろげると、薄くて真っ黒な傘の袋が、E黒百合の花弁のように、ふわりと開いた。

（堀江敏幸「黒百合のある光景」による）

問一 傍線部1～5のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに書き改めよ。

問二　傍線部A「文夫さんは、会社の都合でひと足先に帰っていた」とあるが、「文夫」の不在の物語設定によって描かれるものとして、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　文夫がいない状況をつくることで、妹夫婦の不和と、結花の緊張と心労が露呈するきまずさが描かれる。
イ　文夫がいない状況をつくることで、義弟の実家と姉妹家族との価値観のずれがことさらに描かれる。
ウ　文夫がいない状況をつくることで、姉妹と結花とおばあちゃんのつながりの強さが焦点化して描かれる。
エ　文夫がいない状況をつくることで、日頃の妹夫婦や結花の穏やかで幸せな家庭の様子が、際立って描かれる。
オ　文夫がいない状況をつくることで、義兄や義弟など男性の存在感の無さが批判的に描かれる。

問三　傍線部B「女性たちが手にしているのは、形も色もうつくしい、装いの一部になりそうな品ばかりで、ビニール傘を、それも二本抱えているような女性はさすがにいない」とあるが、「ビニール傘を、それも二本抱えているような女性」とはどのような人かを説明したものとして、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　虚飾にみちた生活に価値を認めず、合理性と効率だけを重視しようとしている人。
イ　彩と美のある生活にあこがれつつも、利便性や経済性のほうに価値を認める人。
ウ　華やかでぜいたくな生活を自分からは遠いものとして考え、質素な生活に甘んじている人。
エ　美しい装いにかこまれた華やかな生活が気になりながらも、生活を楽しむ余裕がない人。
オ　ぜいたくや華美に走ることを避け、無駄をなくして、物欲に左右されない生活をよしとする人。

問四　傍線部C「妹は複雑な顔をする」とあるが、なぜ「複雑な顔」をしたのか、八〇字以内で説明せよ。

問五　傍線部D「不意を突かれて、一瞬、言葉を失う」とあるが、結花のことばがどのようなものであったからか、八〇字以内で説明せよ。

問六　傍線部E「黒百合の花弁のように、ふわりと開いた」とあるが、どういうことを表現したものか、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　発想の転換で、黒い傘袋のようなものでも、日常に思わぬおもしろみを添えることができるということ。

イ　黒い折り畳み傘のように、普段忘れてしまいがちなものにこそ、美しさが宿っているということ。

ウ　華やかな彩のない日常のなかのストレスやネガティブな感情が黒い花になって顕現したということ。

エ　忘れていた傘の黒い袋が、服喪を示すと同時に、気持ちを明るくするものになったということ。

オ　黒い傘の袋が、故人をしのぶ三回忌のお供えの花に見立てられるものになったということ。

第三問

次の文章は、『古今著聞集』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、原文の表記を一部改めた）。（40点）

みちのくに田村の郷（注1）の住人、馬の允（注2）なにがしとかやいふ男子、鷹（注3）を使ひけるが、鳥を得ずしてむなしくかへりけるに、赤沼（注4）といふ所に、鴛鴦（注5）の一番居たりけるを、くるり（注6）を持ちて射たりければ、あやまたず雄鳥にあたりてけり。その鴛鴦をやがてそこにてとり飼ひて、餌がら（注8）をば餌袋に入れて家にかへりぬ。（注7）そのつぎの夜の夢に、いとなまめきたる女の小さやかなる、枕にきてさめざめと泣き居たり。あやしくて、「なに人のかくは泣くぞ」と問ひければ、「きのふ赤沼にて、A させるあやまりも侍らぬに、年来の男を殺し給へるかなしみに耐へずして、参りて愁へ申すなり。B この思ひによりてわが身もながらへ侍るまじきなり」とC、一首の歌を唱へて、泣く泣く去りにけり。

日暮るれば誘ひしものを赤沼の真菰（注9）がくれの独り寝ぞうき

あはれにふしぎに思ふほどに、なか一日ありて後、餌がらを見ければ、餌袋に鴛鴦の雌鳥（注10）の、嘴（注11）をおのが嘴に食ひかはして、死にてありけり。これを見て、かの馬の允、やがて髻（注12）を切りて出家してけり。E この所は前の刑部（注13）の大輔仲能（注14）朝臣が領（注15）になん侍るなり。

（注）1　みちのくに田村の郷――現在の福島県郡山市内の地。
2　馬の允なにがし――田村氏の臣下の赤沼右馬允を指すか。
3　鷹を使ひけるが――鷹を使って狩りをしたが。

4　赤沼――現在の福島県郡山市中田町赤沼。
5　鴛鴦――おしどり（鴛鴦）の古名でカモ科の水鳥。
6　くるり――水鳥等を射るための矢。
7　とり飼ひて――鷹に餌として与えて。
8　餌がら――餌の食べ残し。
9　真菰――水辺に生える草の名。
10　嘴――くちばし。
11　食ひかはして――くわえ合わせて。
12　髻――髪を頭の上に集めてたばねたところ。
13　刑部の大輔――訴訟の裁判や罪人の処罰などをつかさどる刑部省の上位の次官。
14　仲能朝臣――田村仲教の子。鎌倉幕府の評定衆の一人。
15　領――領地。

問一　傍線部A「させるあやまりも侍らぬに」を現代語訳せよ。

問二　傍線部B「この思ひによりてわが身もながらへ侍るまじきなり」について、「この思ひ」の内容を具体的に明示しつつ、現代語訳せよ。

問三　傍線部C「日暮るれば誘ひしものを赤沼の真菰がくれの独り寝ぞうき」について、この歌に込められた心情を説明せよ。

問四　傍線部D「ふしぎに思ふ」は、誰が何を不思議に思ったのか、具体的に説明せよ。

問五　傍線部E「出家してけり」とあるが、どうして馬の允は出家したのか、八〇字以内で説明せよ。

第四問

次の文章を読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。（40点）

臨安民張公子者、嘗至一寺、見敗屋内古仏無手足、取帰、荘厳供事之。歳余、即有霊響、其家吉凶事輒先告之。凡二、三十年。建炎間、金人犯臨安、張窟伏智井、似夢非夢、見所事仏来与之別。曰、

「汝有難当死、吾無策可救。縁前世在黄巣乱中曽殺一人、其人今為丁小大、明日当至此、殺汝以報。不可免矣。」

張怖懼。明日、果有人携矛臨井、叱張令出。既出、即

A

1

（注1）臨安　（注2）敗屋　（注3）供事　（注4）建炎　（注5）窟　（注6）智井　（注7）黄巣

欲レ刃之。張呼曰、

B「公非丁小大乎。」

其人駭問曰、

「何以知我名(注8)氏。」

2 C 具告仏語。其人憮然擲刃于地曰、

D「冤(注9)可解不可結。汝昔殺我、我今殺汝、汝後世又

当殺我、何時可了。3 今釈汝以解之。然汝留此必為

後騎所戕。且与我偕行。」

遂令相従数日、度其脱也、乃遣去。

(『夷堅志』による)

（注）1　臨安――現在の浙江省杭州市。宋朝は、一一二七年、皇帝徽宗が北方から侵攻してきた金（北方異民族）に捕らえられるという大事件により、臨安に都を移し、高宗が即位して宋朝を再興（南宋）した。

2　敗屋――壊れた家。あばら屋。　3　供事――供え物をささげて拝むこと。

4　建炎――中国・宋の高宗の時に用いられた年号（一一二七～一一三〇）。　5　竄伏――かくれる。　6　習井――涸れ井戸。

7　黄巣乱――唐末に黄巣が起こした反乱。黄巣は長安を攻略して陥落させ、自ら皇帝として即位したが、八八四年、官軍に攻められて自殺した。

8　名氏――姓名。　9　冤――（前世からの）恨み、かたき。

問一　傍線部1～3の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二　傍線部A「見所事仏来与之別」とあるが、仏はなぜ張に別れを告げたのか、説明せよ。

問三　傍線部B「公非丁小大乎」を全てひらがなで書き下し文に改め、現代語訳せよ。

問四　傍線部C「告仏語」とあるが、仏が張に語った内容について具体的に説明せよ。

問五　傍線部D「冤可解不可結」とあるが、それはなぜか、説明せよ。

国語B　解答用紙　（二枚中　その一）

受験番号

得　点

第一問

問一	問二	問三	問四	問五	問六
1					
2					
3					
4					
5					

第二問

問一	問二	問三	問四	問五	問六
1					
2					
3					
4					
5					

国語B　解答用紙

（二枚中　その二）

受験番号

第三問

問一	問二	問三	問四	問五

第四問

問一	問二	問三		問四	問五
1 チ		（書き下し文）	（現代語訳）		
2 ニ					
3 ハル					

国語B正答例

第一問

問一　1　虚心　2　いさ　3　包摂　4　たか　5　かえ

問二　エ

問三　ごんの罪の償いが兵十に通じ、また兵十に気持ちが通じたことをごんが知ることができたということ。

問四　和解と許しがあるという期待に反して、「一度起きたことは、もう償いのできないものだ」という人生の苦い真実を突きつけ、読者自身の問題として考えさせるということ。

問五　登場人物の「客」が自らの少年時の視点で出来事を語り、話が現在に戻らない構造になっているところ。

問六　エーミールを語り手にして、エーミールの視点からのみ出来事を語るように書くということ。

第二問

問一　1　挨拶　2　緩斜面　3　ふいちょう　4　もも　5　拭

問二　ウ

問三　エ

問四　娘が、姉の前で、夫の実家ではみせなかった元気な様子をみせたことが、口に出せば実家の悪口になってしまうような隠せないストレスがあることになってしまうから。

問五　木なら燃えて残らなかったという結花の他意のない指摘が真理を突いていて、相手を子どもだと思って発した自らの言葉のいかげんさを鋭く突いたものになったから。

問六　エ

第三問

問一　これといった過ちもございませんのに

問二　長年連れ添った夫（男）を突然殺された悲しみで自分も生き永らえることが出来そうもありません。

問三　仲睦まじく夜を共に過ごしていた夫を亡くし一人で寝るのが寂しくてとても辛い。

問四　馬の允が、夢で見ず知らずの女が夫を馬の允に理不尽に殺された悲しみを訴えたこと。

問五　夢で夫を殺された悲しみを訴えた女が、自分が射殺し鷹の餌にした鴛鴦の連れ合いだったと分かり、畜生に夫婦の情愛の強さと殺生の罪深さを思い知らされたから。

第四問

問一　1　すなは（わ）　2　つぶさ　3　を（お）

問二　次の日に、張は死ぬ運命であるのに、仏には救うべき策がなかったので。

問三　《書き下し文》こうはていせうだいにあらずや（、と）。

《現代語訳》あなたは丁小大ではないのか（、と）。

問四　お前は前世、黄巣の乱の最中に一人の男を殺したが、その男は現世、丁小大となり、明日ここでお前を殺して復讐を遂げるはずだ。その運命から逃れることはできない。

問五　前世からの恨みはどこかで断ち切らなければ、未来永劫消えることはないので。